

及織田氏亡。移于加賀。祖諱言親。仕加賀大夫横山氏云々。と見ゆ、また太宰言辰が墓碑にも、其先平手氏、莫詳出自。據耳目所暗記。方平大將軍興于安土也。其高祖中書君。以骸諫。精忠聞海内。其子監物君。汎秀以騎將。歿于味方原。其子秀言徒加陽。其子言親生大公諱言辰。其第三子也。とありて、秀言初て金澤に來寓して横山氏に扶持せらる。是則忠左衛門也と。傳説に云ふ。平手氏の子孫は横山の家士なりといへども、其の初め世々客分の扱にて、後孫に至り初て家老と成れりといへり。其の曩祖中務大輔政秀が事は、信長記に詳細に記載す。其の略傳は、日本人物史に、平手政秀者尾州人也。織田信秀以林平手二氏爲信長左右。信長少。無人君之量。林欲廢信長而立次男。平手不黨于林氏。遺一封之諫書於信長。自殺而逝矣。信長歎惜。創建一寺。名曰政秀寺。蓋修政秀之冥福也。有二子。長曰某。歿于長嶋之役。次曰某。死于箕形原之軍。とありて、實に父子三人義士の隨一といふべし。

○横山氏家士宮崎豊左衛門傳

元和二年武功書に云ふ。二百五拾石宮崎豊左衛門。關東八

王寺御陣之刻、肥前守様に有之。八王寺城攻二丸へ乗り、鎧手を負ふ。則宮崎藏人と一所に乗り、藏人も其場にて鎧手二ヶ所負被申、我等と一所に退き候。就夫當座之爲御褒美、從肥前守様藏人殿へ被下、御脇差并御馬一疋私に藏人殿より給り、其上種々斟酌仕、藏人苗字も給候。其以前之名字は山内豊太郎と申。其後は宮崎豊左衛門に罷成申刻、亦具足申給ひたり。其後は山城守所に罷在、大聖寺にて鐘の丸へ一番乗仕、鎧手二ヶ所負。後山城守大聖寺表之穿鑿被致、骨折として知行百石加増仕候。大坂表之儀、兩陣共山城守鎧奉行被申付。就夫去年五月七日、惣構柵之内迄山城守に着申、則岡山に而敵味方入亂之刻、山城守に言葉を合、其後亦柵之内にて山城守に言葉を合、先へ罷越、手をふたげ申。とあり。

○横山氏家士長屋喜右衛門傳

元和二年武功書に云ふ。二百石長屋喜右衛門。徳山五兵衛所にて鐵炮大將被申付、亦其後のぼり奉行被申付。越前へ柴田殿入國之次年、しつへ御手遣候跡に、一揆起候て、本丸之堀迄付候得ども、城中強候て取繼ぎ候時、我等は五

兵衛屋敷之留守仕候へと被申により、一揆のき口をしらす高名仕、柴田殿御感に預り候。又當國佐良にて鎧を合候。高岡様に居候時、關東八王寺にて首二つ取申。とあり。按ずるに、徳山五兵衛は加賀土着の人なり。能美郡に徳山村あり。是本居なるべし。三州志難繼餘考に云ふ。天正八年閏三月柴田勝家、加賀一揆共を征伐し、尾山城を佐久間玄蕃居城とし、松任城に徳山五兵衛を置き、御幸塚城に徳山少左衛門を置く。少左衛門は五兵衛の父也。五兵衛は天正十一年より藩祖高德公に仕へ、慶長四年瑞龍公片山伊賀を殺害の時出奔して、徳川家に仕ふ。とあり。佐良は加賀國能美郡の邑名也。

○横山氏家士松山助右衛門傳

元和二年武功書に云ふ。二百五拾石松山助右衛門。本國越前。則朝倉式部大輔所に代々在之、子息土橋右近所に罷在。越前之内北袋谷の城柴田殿被攻落時、首一つ討取。其後前田又次郎殿に有之、關東八王寺城にて首一つ討取。大坂兩陣に山城守のぼり奉行被申付。去年は大坂二の丸堀田圖書丸へ、御家中一番にのぼりを付入候。彼丸堀を破り、内へ

入申儀は、式部内田中八右衛門、大膳内長谷川五右衛門と、我等一番に入。此三人之外誰々も、先へ入候者有之間敷、漸追々に山城守者共集り、圖書臺所通ひ入口へ押寄候得共、敵付出、何れも川を堺ひ、我等も鎧を合せたり。合候儀は、山城守内岡本左門、大膳内長谷川五右衛門存知候。圖書丸を取申儀は、何様に被申とも山城守者共取申。とあり。三州志に、横山山城家士木村權兵衛、伴太左衛門、伊藤左源太、松山助右衛門、岡本左門、長谷川五右衛門、廣瀬宇右衛門、以上七人於堀田圖書丸鎗功ありて、伊藤以下五人へ賞譽、白銀二枚、帷子二つを賜へり。松山助右衛門が子孫は、今松山彌一兵衛是也とあり。

○横山氏家士伴太左衛門傳

元和二年武功書に云ふ。三百石伴太左衛門。本國越前、生年廿三に罷成、親は伴與市郎と申。去々年大坂御陣之刻、先懸仕、眞田丸柵へ着、手を負、何も本陣へ引取被成處、跡に居残り候へば、引取候へと兩使迄參候に付引取る。様子は本多安房守殿之内村田助左衛門、佐藤覺右衛門存知候。去年五月七日に首三つ取り、山城守へ見せ、其上二之丸に